



下道基行《津波石》(2015年～)

『民族藝術学会誌 arts/』リニューアル創刊記念  
公開シンポジウム

ヴェネツィア・ビエンナーレ2019日本館

# Cosmo- Eggs

## 宇宙の卵

アートと  
人類学の  
交点から考える

開催日 | 2020年1月12日[日]

時間 | 13:00-16:15 (開場12:30)

会場 | 国立国際美術館・講堂  
大阪市北区中之島4-2-55

申込み | 入場無料 要事前申込み(2019年11月20日受付開始)

下記のウェブサイトよりお申し込みください

民族藝術学会 HP

<http://www.ethno-arts.sakura.ne.jp>

問合せ | 民族藝術学会事務所 [mg\\_gakkai@yahoo.co.jp](mailto:mg_gakkai@yahoo.co.jp)

tel 06-6850-5127 [大阪大学西洋美術史研究室 火・水曜対応]  
できるだけメールでお願いします



主催:民族藝術学会

共催:国立国際美術館

第58回ヴェネツィア・ビエンナーレ(2019年)の日本館は、服部浩之のキュレーションのもと、美術家・下道基行、作曲家・安野太郎、人類学者・石倉敏明、建築家・能作文徳という、異なる領域で活動するメンバーの協働によって展示がなされた。

その展示は、1950年代に建設された日本館の建物の内と外とを大胆に接続するものとなった。核となる内部の空間には、“Singing Bird Generator”の12本のリコーダーの音が間欠的に響き、映写される津波石の映像と時に共振する。モノクロの映像がうつしだすのは、自然災害の産物であると同時に人の暮らしの風景にも溶け込んだ、「津波石」だ。そのモチーフは創世神話のヴィジョンと重ねられる一方で、巨大な震災を経験したわれわれの社会の現実とも響き合う。

シンポジウムでは、この「Cosmo-Eggs | 宇宙の卵」のヴェネツィアでの展示の情景を、下道、石倉のトークと、実地の映像によってつぶさに紹介する。作品に試みられた「共異体的協働」の効果とはどのようなものであったのか。近年注目されるアートと人類学の接近が何をもたらすのか。アートクリティックはそこで何をなしうるのか。映像人類学者・川瀬 慈とキュレータ・中村史子の2名のディスカッサントも交えて語り合いたい。



展示風景(部分) 右:下道基行による映像作品 中:安野太郎による音楽作品 奥:石倉敏明による創作神話/撮影:ArchiBIMIng/提供:国際交流基金



下道基行 したみちもとゆき

2001年武蔵野美術大学造形学部油絵科卒業。日本各地に残る戦争遺構を調査撮影したシリーズ『戦争のかたち』(2001-2005)、自らの祖父の遺した絵画を追って旅したシリーズ『日曜画家』(2006-2010)や、日本の国境線の外側を旅し日本植民地時代の遺構の現状を調査するシリーズ『torii』(2006-2012)など。旅やフィールドワークをベースにした制作活動を続けている。



石倉敏明 いしくらとしあき

1974年東京都生まれ。秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻准教授(人類学・神話学)。明治大学野生の科学研究所研究員。環太平洋の比較神話学に基づき、インド、ネパール、東北日本各地で「山の神」神話研究おこなう。近年は秋田を拠点に同時代のアーティストとの共同制作を実施する。共著に『Lexicon 現代人類学』(以文社、2018年)、『野生めぐり 列島神話をめぐる12の旅』(淡交社、2015年)等。



川瀬 慈 かわせいつし

1977年岐阜県生まれ。映像人類学者。国立民族学博物館/総合研究大学院大学准教授。エチオピアの楽師、吟遊詩人の人類学研究、民族誌映画制作に取り組む。同時に人類学、シネマ、アートの交差点から創造的な叙述と語りを探求する。近年は客員教授としてハンブルグ大学、ブレイメン大学、山東大学、アジズアババ大学等で映像人類学の理論と実践について教鞭をとる。近著『ストリートの精霊たち』(世界思想社、2018)が第6回鉄犬ヘテロトピア文学賞を受賞。



中村史子 なかむらふみこ

愛知県美術館学芸員。専門は視覚文化、写真、コンテンツポラリアート。担当した主な展覧会に「これからの写真」(2014)、「魔術/美術」(2012)、「放課後のはらっぱ」(2009)など。また、若手作家を個展形式で紹介する「APMoA Project, ARCH」を企画し、伊東宣明(2015年)、飯山由貴(2015年)、梅津庸一(2017年)、万代洋輔(2017年)を紹介。2017年にはタイでグループ展「Play in the Flow」を企画、実施。

\*このシンポジウムは科研プロジェクト「領域横断的な『グローバル・アート学』の構築」(挑戦的研究(萌芽)、研究代表者・岡田裕成)の一貫をなすものです。

## プログラム

挨拶 吉田憲司(民族芸術学会会長・国立民族学博物館館長)

趣旨説明 岡田裕成(大阪大学)

制作者と作品の紹介～展示空間の動画などを交えて

下道基行(現代美術作家、ヴェネツィア・ビエンナーレ2019日本代表)

石倉敏明(秋田公立美術大学、ヴェネツィア・ビエンナーレ2019日本代表)

コメント 川瀬 慈(国立民族学博物館)

中村史子(愛知県美術館)

ディスカッション 下道基行、石倉敏明、川瀬 慈、中村史子 司会:岡田裕成

閉会挨拶

全体司会:大久保恭子(京都橘女子大学)



## アクセス

- | 京阪電車中之島線「渡辺橋駅」(2番出口)から南西へ徒歩5分
- | 地下鉄四つ橋線「肥後橋駅」(3番出口)から西へ徒歩約10分
- | JR「大阪駅」、阪急電車「梅田駅」から南西へ徒歩約20分
- | JR大阪環状線「福島駅」、東西線「新福島駅」(2番出口)から南へ徒歩約10分
- | 阪神電車「福島駅」(3番出口)から南へ徒歩約10分
- | 地下鉄御堂筋線「淀屋橋駅」、京阪電車「淀屋橋駅」(7番出口)から西へ徒歩約15分
- | 市バス「大阪駅前」から、53号・75号系統で、「田蓑橋」下車、南西へ徒歩約3分

※当館には専用駐車場はありません。ご来館は電車・バスをご利用ください。※心身に障がいのある方で、車で来館される場合は、当館北側の有料駐車場をご利用くださいますようお願いいたします。